みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

モンゴルにとって20世紀とは何であったか？

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001893

小長谷有紀編『モンゴル国における20世紀』
国立民族学博物館調査報告 41: 3-6 (2003)

モンゴルにとって20世紀とは何であったか？

小長谷有紀
国立民族学博物館民族社会研究部

13世紀以来，モンゴル高原の主人公であったモンゴル人たちにとって，20世紀とは明確な国境によって同胞がソ連，中国，モンゴルの3つの国に分断された時代である。

1911年の辛亥革命によって清朝の支配がゆらぐとともに，民族を統一する動きが起こる。にもかかわらず，中国，ロシア，日本などの列強の干渉によって統一は容易ではなく，先がけてクーロン（現在のウランバートル）で1921年に人民党による政府が樹立された。そして1924年，それまで名目上の首座に居た活仏が寂滅すると，これを契機として，モンゴル人民共和国の成立が宣言された。大国のはざまにあって唯一，民族自治の果たされる独立国家として「モンゴル」が成立したのである。

中国からの直接的な干渉は，その後に中国内蒙古自治区となる地域のモンゴル人がもっぱらひきうけた。また同様に，ソ連からの直接的な干渉は，後にブリヤート共和国になるモンゴル人がひきうけた，と言えよう。いわば南北双方に緩衝地帯が存在したのである。それゆえに，モンゴル人は国境によって分断されながらも，唯一の独立国家としてモンゴルを維持することができたように思われる。

こうして20世紀初頭，モンゴル人民共和国は，ソ連につぐ世界で2番目の社会主義国としての道を歩み始める。

1939年に東部国境付近でハルハ川戦争（日本ではノモンハン事件と呼ばれている）が起きると，国土を守るという目的のためにソ連から大量の軍隊が投入された。第2次世界大戦が終結してもなお，そうしたソ連との協調は変わらず，それどころか，あらゆる側面でソ連の指示を受けるようになる。名目的に自治国家であるとは言うものの，実質的にはソビエト連邦の1つの共和国とさえ言われた。

1960年代に入ってソ連と中国の対立が強まると，ますますソ連のモンゴルに対する支配は強まってゆく。ただし，政治的な命令を拒否できないという従属関係の見返りとして，さまざまな投資をソ連から受ける。都市におけるアパート建設，工場建設，発電所建設など多くのインフラは，ソ連からの贈り物として実現された。

そして1989年，ソ連におけるペレストロイカの影響を受けてモンゴルでも民主化運動が活発になり，1992年に人民革命党による一党独裁制が放棄され，モンゴル国に生まれ変わった。すなわち，モンゴルにとって20世紀とは「社会主義の選択とその放棄」という大きなうねりを経験する時代なのである。

分断された民族のなかでかろうじて独立国家が維持されてきたモンゴル国において，「社会主義の選択とその放棄」とは何だったのであろうか。社会主義化と同義で進め

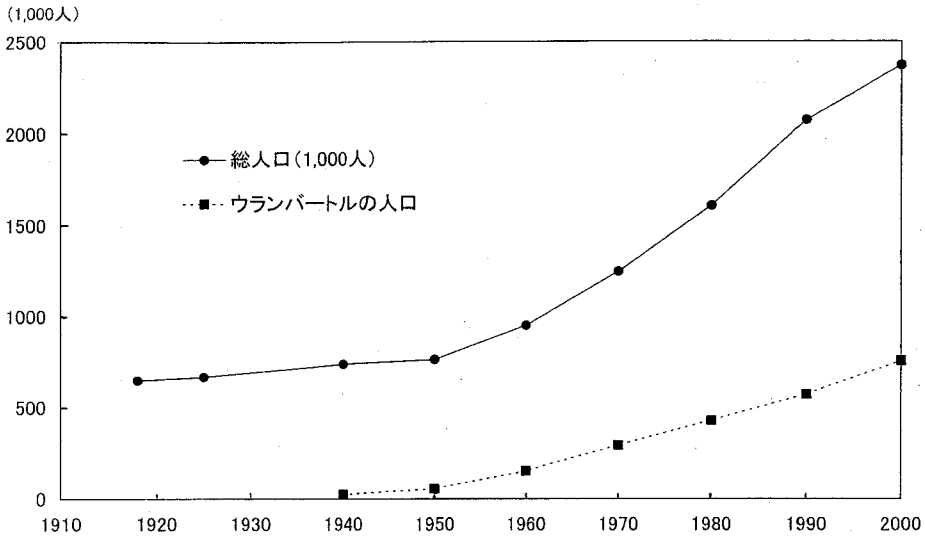

図1　モンゴル国の総人口とウランバートルの人口

Дэндэвийн Дашжав "Улаанбаатар Хотын ХУн Ам", 1993.
"Population of Mongolia, 1994", State Statistical Office of Mongolia. 1994
"Mongolian Statistical Yearbook 1998" National Statistical Ofiice of Mongolia, Ulaanbaatar, 1999.
"Mongolian Statistical Yearbook 1999" National Statistical Ofiice of Mongolia, Ulaanbaatar, 2000.
"2000 Population and Housing Census: The Main Results"Mongolia National Statistical Office, 2001. 松嶋愛作成

られた近代化とは何だったのであろうか。実質的に人びとの暮らしはどのように変わったのであろうか。

その概要は，幾つかの統計で明示することができる。

第1に，人口増加が著しい（図1参照）。2大国のはざまにあるモンゴルにとって人口は国力に等しく，積極的な人口増加政策が採られていた。たとえば，1958年からは，5人以上の子どもを産んだ母親に第二勲章，8人以上なら第一勲章が与えられることとなった。以来，1994年3月8日までに全国で第一勲章を受けたのは57,681人，第二勲章を受けたのは190,234人である（小長谷 1999）。合計特殊出生率は，1993年全国レベルで3.5人であるが，1980年まで草原部では約7人と高く，女たちとりわけ草原の女たちはたくさんの子どもを産み続けてきた（前川 1997）。

第2に，都市化が進展した。積極的に産み続けられてきた人口の大部分は，都市へと吸収されてゆく。都市人口の割合は，20世紀後半に急激に増加し，現在でも著しく高い。都市人口の増加は，都市における工場の建設など，都市そのものの拡充を反映している（図1参照）。

第3に，家畜の増加が認められる。一般に，20世紀を通じて家畜はあまり増加していないように思われている。たしかに，1930年の合計頭数は約2300万頭であり，寒害の影響による減少を経て，2002年現在になると2370万頭となり，さほど差がない。し

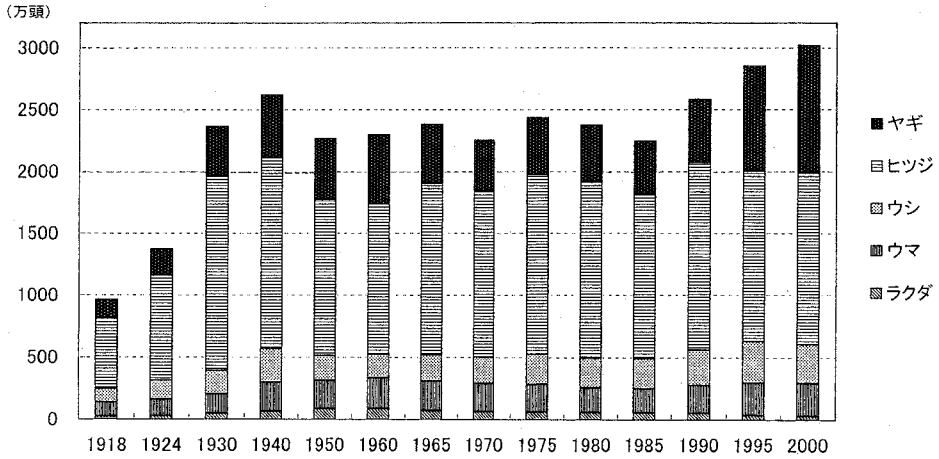

図2　モンゴル国の家畜増加（1918—2000）

"БНМАУ-ЫН УЛС АРДЫН АЖ АХУЙ 1976 Статисткий Змхтгзл", Улсын Хзвлзлийн Газар. Улаанбаатар. 1977
"Mongolian Economy and Society in 1994", National Statistical Office of Mongolia, Ulaanbaatar, 1995
"Mongolian Statistical Yearbook 1997" National Statistical Office of Mongolia, Ulaanbaatar, 1998
"Mongolian Statistical Yearbook 1999" National Statistical Office of Mongolia, Ulaanbaatar, 2000
及び農牧省　　松嶋愛作成

かし，20世紀初頭の数値（1918年965万頭）と比較すると，その増大は軽視できないであろう（図2参照）。

また，社会主義的集団化が進むにつれて，都市への流通が確保され，同時に都市が大きくなり，都市における消費が増大する。こうした消費分が，家畜頭数には計上されていない。食べられた家畜の数も加えて飼養頭数とみなすと，その数は相当に上昇していると言えよう。

さらにまた，家畜の種類によって増減は異なる。ラクダが交通機関としての役割を減じて減少したのに対して，ウシは20世紀に増加した。都市に牛乳を搬出する目的で酪農場が建設されたからである。ヤギの急増は，カシミヤ原料として高価で取引されるために民主化以降認められる現象である（図2参照）。

こうした家畜の増加は，さまざまな固定施設を建設して遊牧民を定着化させ，畜産物を都市に供給する，という牧畜の産業化によって導かれたものである。

第4に，農業が開始された。20世紀の初頭，すでに一部の地域で中国人が農耕に従事することはあった。しかし，社会主義のもとで「未開拓地の開墾」という運動が進展し，国家の産業として農業が確立してゆく。1960年にようやく20万ヘクタールに達していた農地は1990年までに80万ヘクタールに達する（図3参照）。

農産物の生産量も，たとえば小麦なら，1985年に68万トンに達し，輸出にも回されていた。ただし，乾燥地帯であるために，降水量の年変動は大きく，収穫は一定ではない。したがって，輸出は収穫量次第という変動的な状態であった。いずれにせよ，

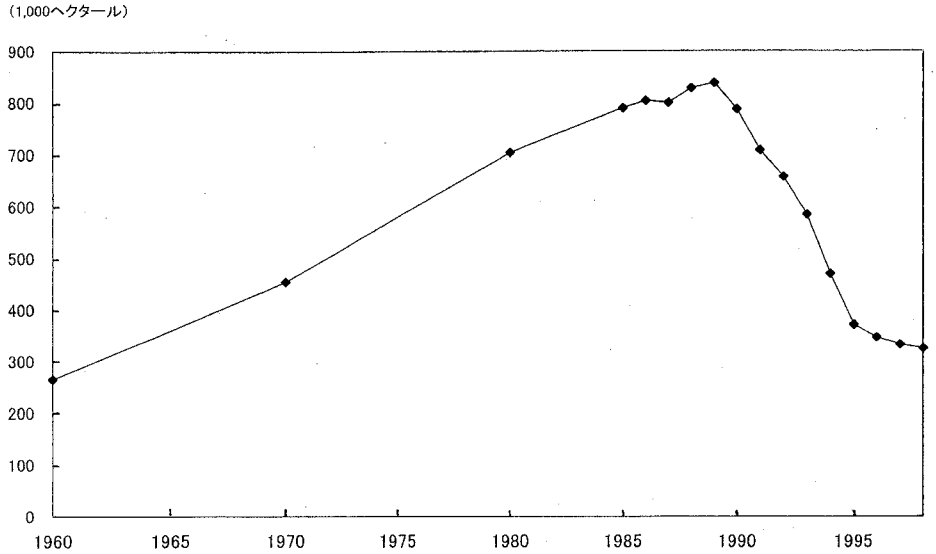

図3　モンゴル国の農地増加（1960−1998）

"Mongolian Economy and Society in 1994", National Statistical Ofiice of Mongolia, Ulaanbaatar, 1995
"Mongolian Statistical Yearbook 1997" National Statistical Ofiice of Mongolia, Ulaanbaatar, 1998
"Mongolian Statistical Yearbook 1999" National Statistical Ofiice of Mongolia, Ulaanbaatar, 2000
松嶋愛作成

農業部門は20世紀後半になって本格化したモンゴルの試みであった。

こうした数値で示される社会の変化について，その変化を積極的に担った人びとの言葉を通じて聞くということは，まさに「モンゴルにとって20世紀とは何であったか？」という問いをめぐる証言に耳をかたむけることにほかならない。

文　献

田中　克彦　1992　「モンゴル－民族と自由』岩波書店（同時代ライブラリー）
モンゴル科学アカデミー歴史研究所（田中克彦監修・二木博史ほか訳）
1988　『モンゴル史』恒文社

小長谷有紀　1999　「草原の国を変えた女たち」窪田幸子・八木裕子編『社会変容と女性』ナカニシヤ出版　4-35頁所収

前川　愛　1997　「人間が少ない国の悩みと楽しみ」小長谷有紀編『アジア読本モンゴル』河出書房新社　168-174頁所収